新編金瓶梅

七集上

馬琴作

國貞画

甘泉堂梓

新編金瓶梅第七集
上帙
上

へ13
4454
13

新編金瓶梅第七集之壹

馬琴編
國貞畫

江戸芝神明前三島町
書肆和泉屋市兵衛刊

夫忠恕ゆゑ物を憐み。辭讓ゆゑて驕らず。誇らず。是を稱て善人とゆふ。善人の德行い必ゝも誌べし。誌べい則外あるべ人ゆ善を勸め為ゆゑ又殘忍ゆゑ慾を恣ゆ。奸佞ゆゑ人を害ゆ是を箴めて惡人とも惡人ゆ支へ述るゆゑ堪ず。其をゝも筆ゆ載るゝゆ人の惡を懲さんとそ。其ハ善を見て惡を憚るを。新編金瓶梅とゆふ年々ゆ編み歲々ゆ。鐫る剞劂氏の小刀子の塵ゝ積て第七集も八の卷ゆ糸口をとくヒアゆ五萬歲と祝ふ新板物の本作者い古稀ゆ又四の緒の琵琶の湖それゆらで硯の海の淺ゝゆゑ趣向を今茲も御賢覽ゝゆ尚若いでゝ仏りませ敎ゆと正辯空言扱まゝで皆是腹の稿の話說を画ゆかく合卷ゆ自序ゆ。

天保十一年庚子春正月吉日　半瞎道人馬琴編

直木直平
由善

春虫第壹

こまやかとあへぐ
あろみづ
かし
花
蝶

西門屋
伴當
伴八

夏虫第貳

子
親
蛍哉

北利妻
蝶鳥

西門屋
白市

夏蟲第二

阪を照る土山ハ
さうぞ蟬ぞれ

寒八妻
阿冷

西門屋伴當
旅助

秋蟲第四

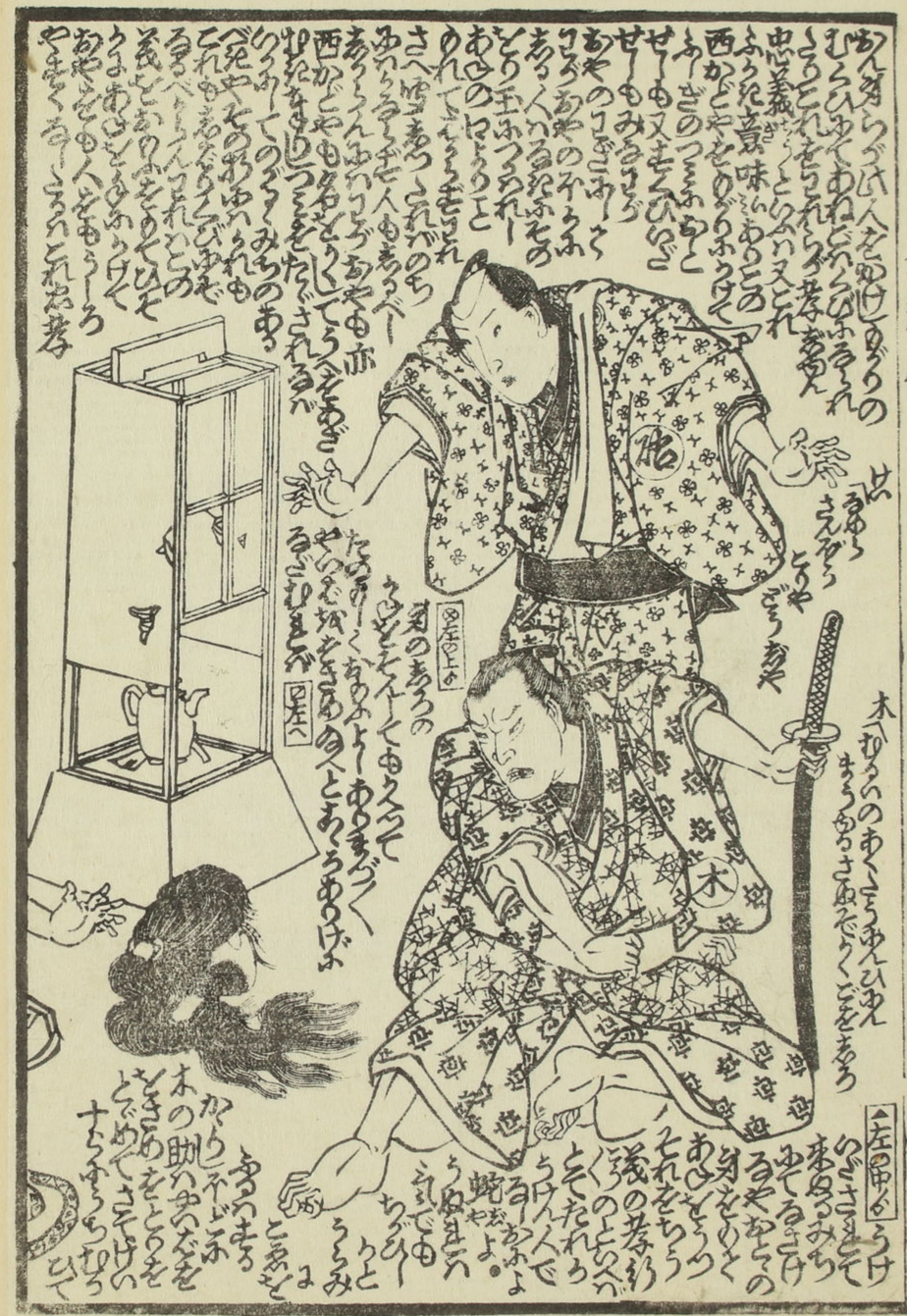
機織や馬追虫と
星乃床

歌妓措塩

夢野屋
鹿吉

秋虫第五
虫吟ずかなる草の
陸水の女僧

冬の北越積雪の中に生出る虫なり其形致ふくて蛾に異なる土人呼て雪虫と云雅客名つけて雪蛾と唐山は所云峨眉山雪蛆の類
第六
朝日や雪の蛆
鳴村弾正貴則


木
秘

念
意
化
秘

和漢駿足 繪本高麗嶽 北尾重政筆 名馬盡 小本 全一冊
花鳥寫真圖會 同 画 極彩色
繪本ぬぢ袴 柳川筆 極彩色
漬物早指南 八百治主人著 初編全冊
餅菓子手製集 初編 後編
女手中祝事始 小本 全一冊
女用文艶詞
女今川千代友鶴
雛形倉百人一首
源氏かるた 極彩色 各入
同 雛かるた 各入
書肆 甘泉堂藏板

馬琴作
國貞画

睫

上帙
下

新編金瓶梅

第七集 二

天保庚子孟春魁本

馬琴作
香蝶樓國貞画

芝書行甘泉堂精刊

冷
寒
秘

梅
昊
蓮

つぎやどそ
ひでまをおくへ
つれ出をく れ
たまわ ぬ ぬえさを
けるふひ でわい
かゆ ろ ろ ろ く

さく春の日
「ゑれん又ひで
松をひき入れて
たのしみをする
りん坊の春う
このゆびべー

ゑいろく ゆきふけの
すらぢかひまうけの酒ふ
とそ又ふまらへあひむ
ゆーとのあのひをうべ
さふてこへやられも
ふあとよりしてかのちへ
まわるなぞゑれかあまら又
この男のいとまとあの
るべーとそやくてを
いそぐをゑれたつらく
らやさてたんるの ふまふらひ
あとさされーいけひ 松とさも八を
あとろうあせとあるるとと
さえふみやこのうぎりひを見くば
この ひあのとう されがとひふ
とさも八をけひ 松ふとのるらせて
あぢまへひくふつれさんとそゆうふ
とひふをようびよせてそのあとこのところば
さびふふはあておゑせぞのそをてあく
あうようこもうあくゆんゆびのの
ようのとーつてあけのあさも八
ひ 松とのろともかまいちをせんと
するよひ 松いよんべよりびあうのろけ
かたりあとそくひとあ もたんびゆ
ざれがこのやくふ ろべも
あーぢゑれあさぐこるる少年
ゑれがこと ひあぢまへこのあふ
ともあさうのあのたすけあい

作者云
「このところはある
そうのうちるうと
いさうあのひをを
ひとくとりみるひと
よろーくさうも
べー

「この男女
くるうをを
さうりんく
あるべー今これをゆゆ

蓮
帆

梅

つゞき
蓮

秋

陸

上
柒
捌

書肆井泉堂藏版略目録

新編金瓶梅 八七編 曲亭馬琴作 香蝶楼國貞画

金昆羅船利生纜 八九編 曲亭馬琴作 歌川國芳画

今昔娘評判記 五編 山東京山作 香蝶楼國貞画

春榮百人一首大全 大本一冊

常盤百人一首 中本一冊

麗玉百人一首 小本一冊

源氏繪盡 渓齋英泉画 中本一冊

美艶仙女香 坂本氏製

書物地本問屋 芝神明前三島町 井泉堂和泉屋市兵衛

特別
へ13
4454
13